

佐伯市自然環境調査

鳥類

武石宣彰

1 調査の概要

平成 17 年に 9 市町村が合併して誕生した佐伯市は、面積が九州で最も広い市となり、変化に富んだ自然環境を有するものとなりました。深島、屋形島などの島嶼とその周辺の海域、上浦から蒲江にかけての海岸線、番匠川水系等の河川などの水辺環境は変化に富んでいます。また市街地に近い所に城山などの豊かな森や干拓地、田畑などがあり、さらに広範な里地里山、そしてその背後には傾山などの標高 1000m を越える山地が広がっています。これらの変化に富んだ豊かな自然環境には多くの鳥類が生息しています。この佐伯市に生息する鳥類とその生息環境を保全するために、この地域における鳥類の生息状況の調査を実施しました。

(1) 調査対象及び調査対象地域

佐伯市において観察される野生の鳥類を調査の対象とし、この地域で繁殖し年間を通して生息している「留鳥」、春に渡来して繁殖し秋には南の地方に移動する「夏鳥」、秋に渡来して越冬し春には北の地方へ移動する「冬鳥」、日本より北で繁殖し日本より南で越冬するために春や秋に日本を通過する「旅鳥」、渡りのルートではないが何らかの理由で目撃された「迷鳥」について生息状況の調査を行いました。

調査対象区域は、それぞれの鳥類の生息環境から以下のように設定しました。

- ①島嶼部及び海上（深島、屋形島、沖黒島、大島、大入島などとその周辺の海域）
- ②海岸部（蒲江、米水津、鶴見、上浦などの海岸とその後背地）
- ③河川（番匠川水系及び北川水系の河川とその周辺地域）
- ④市街地近郊（佐伯市街地及び城山、女島などの市街地周辺地域）
- ⑤里地里山（大越、本匠、青山、宇目などの人家や田畑及びその周辺の山林）
- ⑥山地（彦岳、佩楯山、傾山、夏木山などの山岳地域）

(2) 調査期間

調査地域における現地調査を平成 21 年 1 月から平成 23 年 12 月の期間に行いました。

(3) 調査方法

- ①現地調査では、河川部や市街地、山地は、調査ルートを時速約 1.5 km で歩き、両側及び上空に出現する鳥類を記録しました。島嶼部や里地里山は数箇所の定点で出現する鳥類を観察して記録し、海岸部は移動しながら両側及び上空に出現する鳥類を記録しました。調査用具には、双眼鏡(8 倍)、望遠鏡(20～45 倍)、カメラ、時計、地図等を使用しました。
- ②文献調査は、平成 20 年以前の鳥類観察記録、日本野鳥の会大分県支部機関紙「たより」、大分県自然環境学術調査、河川水辺の国勢調査、各町誌村誌などを行いました。

2 調査結果と鳥類の生息状況

平成 21 年 1 月から平成 23 年 12 月にかけて現地調査を行い、15 目 43 科 142 種の鳥類を確認しました。これに文献調査で確認された種を加え、佐伯市全体として 17 目 58 科 256 種の鳥類を記録しま

した。大分県内では 335 種の野生鳥類が確認されていますが、今回の現地調査及び文献調査から、佐伯市では大分県内に生息する鳥類の 76.4%を確認することができました。(佐伯市鳥類目録参照)

佐伯市と大分県全域の鳥類の生息状況を比較してみると以下ようになります。

(1) 目別種数構成比の比較

スズメ目やチドリ目など各目ごとに構成する鳥類の種数を比較すると図 1、図 2 のようになります。佐伯市では大分県全域の約 8 割近くの種類が出現していますので、その目別種数構成比は非常に似たものとなっていますが、カモやタカの仲間の種類数が少し少ない分、森林性の鳥などのスズメ目の割合が若干高くなっています。

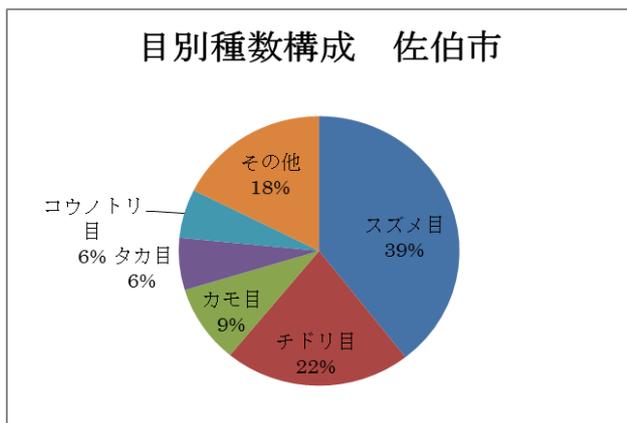


図 1

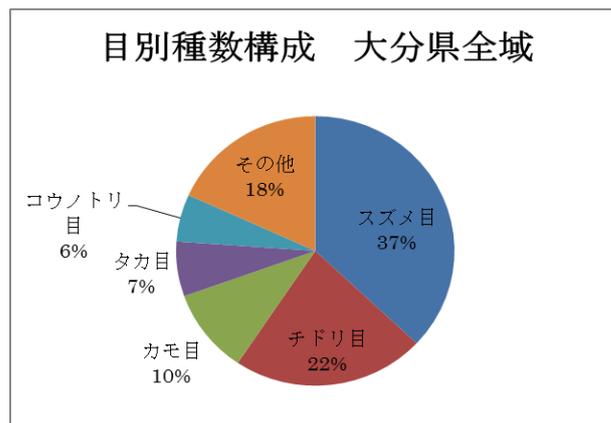


図 2

(2) 生活型特性の比較

鳥類を生息の状況から、夏鳥、冬鳥、留鳥、旅鳥、迷鳥に区分してその構成種数をレーダーチャートにすると図 3、図 4 のようになります。大分県全域と比較すると、夏鳥と留鳥はほぼ同様の種類が生息していますが、冬鳥と迷鳥が少なくなっています。

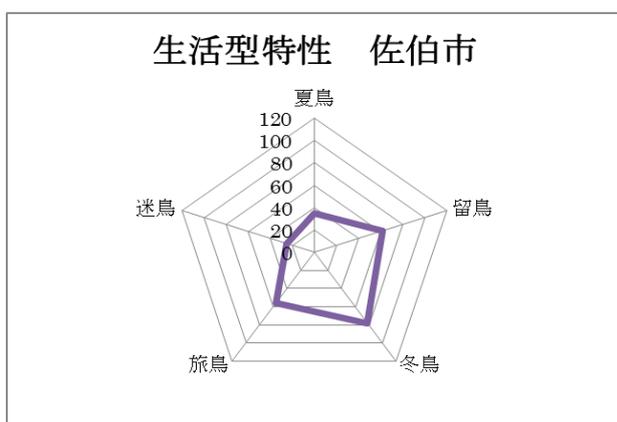


図 3

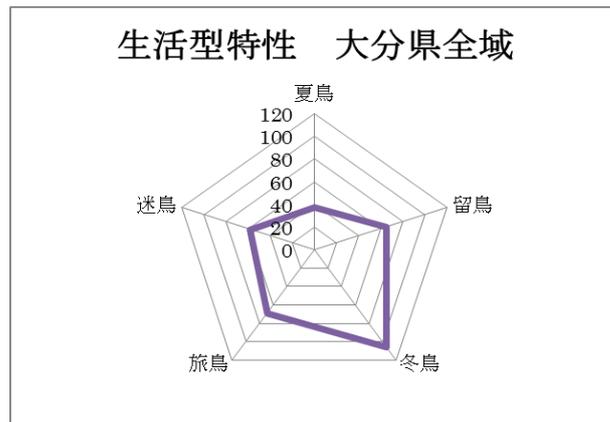


図 4

(3) 環境別の鳥類の生息状況

3 年間の現地調査結果から得られた 6 個所の調査対象地域別の鳥類の生息状況は表 1 のようになります。鳥類の環境別の生息種数では、最も種類が多かった環境は「河川」で、番匠川水系や北川水系の

河川部とその周辺の河畔林などです。それに続いて「市街地近郊」、「里地里山」となっています。鳥にとってエサが豊富で採り易いことが生息の重要な要素となり、そのため水辺や人の生活圏に近い所で生息する種類が多くなったと思われます。またトビ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、ヤマガラ、メジロ、ホオジロは分布域が広く、全ての環境で見られました。



トビ



ヒヨドリ



ウグイス



エナガ



ヤマガラ



メジロ



ホオジロ

現地調査以前の観察記録や文献記録も加えた環境毎の鳥類の生息状況は以下の通りです。

①島嶼部及び海上（深島、屋形島、沖黒島、大島、大入島などとその周辺の海域）

深島、屋形島、沖黒島では国の天然記念物で環境省と大分県のレッドデータブックで準絶滅危惧種に指定されているカラスバトが生息しています。カラスバトは離島の常緑広葉樹林や灌木林に生息して、シイやタブの実などを主な食物としています。1回の産卵では1個の卵しか産まず、繁殖力が強く無いために絶滅が懸念されています。沖黒島ではオオミズナギドリとカワウが集団で繁殖しています。オオミズナギドリは日中は海上でエサを採り、夜になると島に帰ってきます。地面に穴を掘り、卵を産んでヒナを育てます。海上では国の天然記念物で絶滅危惧種のカンムリウミスズメが見られます。この地域はカンムリウミスズメの繁殖地である宮崎県門川町の枇榔島が近く、そこで繁殖したものが拡散していると思われます。



カラスバト



オオミズナギドリ

この豊後水道は春や秋には渡り鳥の通過コースとなっており、オオルリやコサメビタキなどの夏鳥やノジコなどの旅鳥が渡り途中の休息やエサの補給などにこれらの島を利用しています。島の周辺の海域や海上ではウミネコやセグロカモメ（冬鳥）などのカモメの仲間やカワウやウミウ（冬鳥）などのウの仲間が数多く見られます。



ノジコ



ウミネコ

②海岸部（蒲江、米水津、鶴見、上浦などの海岸とその後背地）

海岸部ではアオサギやクロサギなどのサギの仲間やカモメの仲間、ウの仲間が多く見られます。冬鳥のウミウやヒメウは越冬の為に渡来して海岸部の岩礁などを利用しています。海岸がリアス式で干潟が少ない為、キアシシギやチュウシャクシギなどのシギやチドリの仲間は少数が立ち寄るのみです。



アオサギ



クロサギ



ウミウ



ヒメウ

猛禽類では絶滅危惧種のみサゴやハヤブサがハンティングを行っており、海岸部での繁殖も確認されています。みサゴはトビと同じくらいの大きさですが、翼はトビより細く体の下面と頭が白いのが特徴です。水面の上空を飛びながら魚を探し、見つけると急降下して水中にダイビングし魚を足で捕えます。ハヤブサは鉄塔の上や断崖の岩場などの見晴らしの良いところで、ヒヨドリやドバトなどを狙います。高速で獲物の小鳥に近づき、上空から急降下して獲物を捕らえます。



みサゴ



ハヤブサ

秋にはサシバやハチクマなどが南へ渡るため、四国から豊後水道を越えてこの海岸部へ入ってきます。鶴見半島から蒲江にかけての海岸は、四国山地の南部を通過したサシバやハチクマの渡りのルートのも北部に当たっており、渡りのシーズンには多くのサシバやハチクマが南下する様子が見られます。



サシバ



ハチクマ

③河川（番匠川水系及び北川水系の河川とその周辺地域）

河川は番匠川、堅田川、久留須川、木立川、北川などで、河口から上流域及びダム湖の水辺とその周辺の河畔林に生息する鳥類の種類は多く、佐伯市の自然環境の中で最も多くなりました。河口には干潮時に干潟が出て渡り途中のチュウシャクシギやトウネンなどシギ・チドリの仲間が羽を休めますが、干潟の面積があまり広く無いため立ち寄る数は少数です。



チュウシャクシギ



トウネン



ソリハシシギ



オオソリハシシギ



コチドリ



アオアシシギ

番匠川下流域の鳥獣保護区では、冬季にたくさんのカモ類が越冬のため渡来し、ヒドリガモやマガモ、オナガガモ、カルガモなど約 2000 羽が羽を休めています。秋の渡来当初、オスの羽はメスと同じような地味な色合いですが、12 月ころにはきれいな色の羽に変わり、メスとペアを作り春には繁殖のために北の地方へ渡っていきます。



ヒドリガモ



マガモ



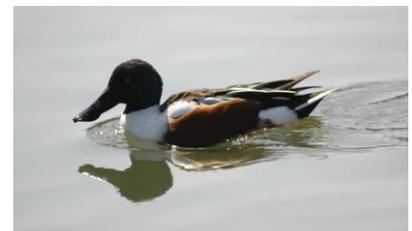
オナガガモ



カルガモ



オカヨシガモ



ハシビロガモ

河川の全域に渡って水辺で生息するサギの仲間やカワウ、カモの仲間、イカルチドリやカワセミ、セキレイなどが見られます。上流域ではカワガラスやヤマセミがこれに加わります。河川に沿った河畔林ではシジュウカラやヤマガラ、メジロなどの森林性の鳥も見られます。冬季、堅田川上流の黒沢ダムでは約 300 羽ほどのオシドリが渡来し越冬します。また北川ダムでは毎年、ブッポウソウ（夏鳥）が 2~3 つがい営巣して子育てをしています。



カワウ



カワセミ



キセキレイ